

松下幸之助記念志財団 研究助成

研究報告

(MS Word)

【氏名】 藤村 達也

【所属】(助成決定時) 京都大学大学院教育学研究科

【研究題目】

グローバル化する学校外教育をめぐる「影の教育」パラダイムの再考：日本型教育産業の歴史的考察から

【研究の目的】(400字程度)

塾・予備校などの学校外教育は「影の教育」とも呼ばれており、近年ではグローバルに教育研究の主要なテーマとして扱われている。比較教育学者のマーク・ブレイが提示した「影の教育」の枠組は世界各地の学校外教育を共通の観点で比較することを可能にし、学校外教育に対する研究者の関心を高め、研究を活性化させるうえで大きな役割を果たしてきた。他方で、この枠組は学校教育と学校外教育の関係における変化と多様性を十分に説明できていないことが見落とされており、またその前提として比較教育研究における西洋中心主義の問題がある。この問題を踏まえ、本研究の目的は、学校外教育産業に関する理論的・実証的分析を通じて、英語圏を中心に普及している西洋中心主義的な学校外教育研究のパラダイムを問い直し、学校教育と学校外教育の関係についての新たな捉え方を提示することである。

【研究の内容・方法】(800字程度)

研究課題①「影の教育」パラダイムが有する西洋中心主義的志向に関する批判的分析

学校外教育研究における「影の教育」パラダイムが有する理論的・方法論的・規範的問題点を批判的に検討する。(1)マーク・ブレイによる「影の教育」パラダイムがいかなる理論的前提を有しているのかを批判的に分析する。(2)学校外教育に関する主要な研究が「影の教育」パラダイムから受けた影響を文献レビューにより検討する。(3)「影の教育」パラダイムと世界文化理論の関連性を分析し、ポストコロニアル理論の観点から批判的に論じる。

研究課題② 学校外教育産業による偏差値の創出・普及プロセスに関する実証的分析

日本の学校外教育産業が、学校教育に影響を与える体制・制度を形成した過程とその帰結を明らかにする。具体的には、大学進学者の増加により教育産業の規模が拡大し、成績情報や合格可能性などの情報を収集・提供する役割を担うようになり、受験生や高校にとって不可欠な存在となったプロセスを、偏差値の創出と普及という観点から跡づける。時期としては、教育の大衆化が進行し、教育産業が全国的に展開した 1960 年代後半から 1990 年代前半を扱う。対象としては、現在においても日本の教育システムに大きな影響を与えている全国規模の教育産業である大学受験予備校(駿台予備学校、河合塾、代々木ゼミナール、東進予備校)と通信教育関連企業(ベネッセ、Z 会)を中心的に扱う。方法としては、刊行された資料および各企業所蔵の資料を中心的に用いる。(a)受験産業の展開の検討には、各社の社史等の資料を用いる。また、各社所蔵資料の閲覧と関係者へのインタビューを依頼する。(b)高校や大学の対応や動向については、高校・大学の学校史や新聞記事、雑誌等を用いる。(c)受験生の対応や動向については、受験雑誌『螢雪時代』等の資料を用いる。

【結論・考察】（４００字程度）

「影の教育」の枠組は、実証主義的な比較研究を主たる目的・方法としている。その一方で、歴史や文化的な視点を持つ研究は乏しく、その背後には西洋中心主義的な認識論が存在している。こうしたことから、非西洋圏の歴史的経験や文化的側面を十分に捉えられる枠組のもとでの研究が求められる。

この問題を踏まえ、戦後日本の受験競争における大衆化と商業化に着目し、偏差値を中心とした受験情報をめぐる体制の形成を検討した。(1)偏差値が進路選択・受験指導に取り込まれ、成績の指標として普及した。(2)受験産業の全国展開とコンピューターの導入により、大量の成績データを分析することが可能になった。(3)入試制度改革により、成績や入試に関わる情報の商品価値が増大した。こうした変化により、受験産業が中心的役割を担う商業化された受験体制が形成された。

以上の検討から、学校外教育と学校教育の関係は入試制度や人口動態、技術環境などによっても変化することから、歴史的・文化的視点を考慮した分析が求められることが示された。